



令和2年度

# 鹿児島県の教育

11月号

## 巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事  
鹿児島県立武岡台養護学校長  
鹿児島県立武岡台養護学校長  
県連合校長協会特別支援学校長部会副部会長

### 障害のある児童生徒の 自立と社会参加を目指して

追田博幸

平成六年のことである。私は県総合教育センターでの長期研修の機会をいただき、自閉児のコミュニケーションについての研究に取り組んだ。研究仮説を考える中で当時の研究主事の先生から御指導いただいたのが、梅津八三先生の理論である。梅津先生は障害者個人の問題だけではなく、関わり合う者相互の問題として捉えた。障害はその人と関わりたいと思っている人の中にもあるという考え方は、それまで自閉児の指導に当たって、コミュニケーションに関わる能力を高めることだけに注目していた私にとって、新たな視点となった。児童自身の発達を促し、言語に関わる力を高めていくのと同時に、関わり手である教師の在り方も学ばなければいけないと強く思った次第である。

特別支援教育の推進に伴い、発達障害を始め、様々な障害に対する理解も随分進み、その障害に伴う指導・支援に関する情報も求めれば簡単に手に入るようになってきた。小・中学校等においても、児童生徒の障害に早期に気づき、その障害に応じた指導法を実施し、その児童生徒ができることを増やそうと取り組むようになった。教師の仕事は、児童生徒の発達援助であることには間違いはない。しか

し、関わり合う者相互の問題として障害を捉えると、日々の学校生活の中で児童生徒がどのようなことに困っているのか、どのような環境を整えると児童生徒が様々な活動に参加し、より学びやすくなるのか、児童生徒と教師の相互の立場から整理することが大切であると考える。まずは、その児童生徒に関わる周囲の人が自己の関わり方も含め、障害に起因する学習面や生活面における困難の状況を真摯に理解することから始めたい。

障害の捉え方の変化に伴い、「自立」の捉え方も変わってきている。特別支援学校における指導の領域に自立活動の指導がある。ここでの「自立」とは、障害のある児童生徒がそれぞれの障害の状態や発達段階に応じて、主体的に自己の力を可能な限り発揮し、よりよく生きていけるようにすることを意味している。指導・支援の方向性としては、障害のある児童生徒一人一人の力を高めつつ、今ある力も十分に発揮して様々な活動に主体的に参加できるように環境を整えていくことができます。重要になる。特別支援教育に携わる者として、児童生徒の細かな発信にも気づく感受性や広い視野で自身の取組を見直すことができる謙虚な心をもちたいものである。

令和2(2020)年 11月号

一般財団法人 鹿児島県校長会館  
〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13  
振替 02030-1-3192  
TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷  
鹿児島市東坂元二丁目29-1  
TEL 247-1605 FAX 247-2844

### \* おもな内容 \*

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般(財)県校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		



## 学びがひろげる

### 夢と希望と可能性

株式会社カイクスウイング

代表取締役社長

岩元文雄

学ぶとはいったいどういうことだろう……。寄稿のお話をいただいてから、私はずっとそのことを考えています。

ふり返ってみると、学校の教室で学んだことは、その後の人生を切り拓くための大きな力になったことは言うまでもありません。しかし、社会に出てから様々な困難に直面しながらも多くの人たちに支えられながらそれを乗り切ってきたことに、大きな学びがあったように思いません。

私が代表を務める（株）カイクスウイングは、福祉用具・住宅改修を通じてご利用者様のADL（activities of daily living 日常生活動作）を補い、QOL（quality of life 生活の質）を高めることを仕事としています。社名の「ウィング」には、必要としているあらゆる方々をあたたく包み込む翼（wing）となつて、社会に奉仕できる企業になるという決意（wellfare+ing）を込めました。ここでのご利用者様との一つ一つの出会いと経験が、実は学びの宝庫なのです。そんなエピソードを一つご紹介しようと思いま

す。ある現場から報告されたHさんの情報に目を

通したとき、暗澹たる気分になったことを鮮明に記憶しています。

Hさんは進行性の難病と向き合っていました。進行とともにADL（日常生活動作）も著しく低下してゆく。それでも奥様は、在宅での介護を希望されました。ほとんど寝たきりで、日常生活すべてに介助が必要な上、Hさんとは言葉すら聞き取りにくくコミュニケーションもままならない。そのような状況で治療を続け、健康管理もしていかなければならない。私には壮絶な老々介護の光景が思い浮かびました。

「在宅での介護でやっていけるのだろうか？」報告に目を落しながら、無意識のうちにそうつぶやいていました。

しかし、実際に奥様のお話を聞いて、私の考えは変わりました。奥様はこう話されたのです。

「お家に連れて帰ってあげたい。そのためには私もできるかぎりのことをします。でもね、私も膝が痛くて重いものを持ちたり、抱えたりすると痛みが出るので、それが不安です。」と。そうしてしばらく考え込んだあと、私の目を見据え笑顔でこう続けられました。「夢かもしれないけど、もう一度二人で気軽に外出したり、

日帰りでもいいから旅行に行ったり、食卓を囲んだり、そんなことができたらいいなあって。」奥様のお話を聞いて、私の「やっていけるのだろうか？」という不安は、「なんとかしてあげたい！ なんとかできるはずだ！」という思いに変わったのです。

もし自分がHさんの立場に立たされたら、そして自分の妻が奥様のように言ってくれたら、どんなにかうれしくて、どんなにか頼もしいことか。逆に自分が奥様の立場に立たされたら同じように行動できるだろうか……。長年連れ添ったご夫婦の愛情、絆の強さに心を打たれました。その愛情、絆を妨げるように病があり障害がある。だったら私たちが福祉用具でご夫婦を守る。それこそが私たちの仕事なのだ。そう思いました。

Hさんの事例では、まず福祉用具は現実の暮らしを支えるものだけど、夢をも支える力になれるということ。そうして福祉用具はご夫婦、ご家族の愛情、絆を守る力を秘めているということ。そしてHさんや奥様のようにご利用者ご本人、ご家族の夢が、希望が、何よりも笑顔が、私たちの元気とやる気を支えてくれるということを学びました。

私たち福祉用具専門相談員は、ご利用者様に多くを学び、その結果としてご利用者様の夢と希望に寄り添い、支えていきたいと思っています。

私は今も学びの日々を過ごしています。学びが福祉用具と私たちの可能性を広げてくれるのです。



## 校長室登校の子どもたち

社会の変化の中で複雑化・多様化する小学校の生徒指導

串木野小(日) 藤山 洋一

### 一 はじめに

今回、機会をいただいたので、学校の現状から一つの提言をさせていただきたい。結論から言うと、小学校における児童支援専任教諭(生徒指導に係る事案の専任窓口)の配置である。

学校には学力向上や生徒指導の問題をはじめ様々な課題がある。その中でも先ずは、全ての児童が学校に来てくれるということに最優先しなければならない。そのことなしには校長としての経営責任を果たしたとは到底言えないと思うからである。

しかしながら、この課題はそう簡単ではない。近年、不登校や不登校傾向の様態も複雑化・多様化している。加えて学校では想定外の突発事案も発生する。校内の支援体制や関係機関との連携強化等、方途を尽くしてもなお出口を見出せないケースもある。生徒指導のセーフティネットに掛からない子どもたちが増えてきたような気がする。このことは、教師が子どもと向き合う十分な時間を確保できない現場の現状を考えると、ある意味当然にも思える。例えば、小学校では週二十八コマの学級担任に果たしてその時間を生み出せるのだろうか。向き合う時間の絶対的不足に

心を痛め、やがて疲弊感すら漂う。時間をかけて関係を築き、その子の内なる声を引き出し実像に触れることができなければ解決の糸口すら見えてこない。相当なエネルギーを要する。

### 二 学校現場での実例(本校での事例)

午前九時過ぎ、今日もまた少し沈んだ表情でAさん(五年生男子)が校長室に入ってきた。校長室登校となつて既に五か月経過する。ここを拠点に担任と連携しながら不登校解消・教室復帰を目指す、いわば校内フリー教室である。彼は知的には非常に高いが、潔癖性傾向があり頻繁に手を消毒する。他人が触れた教室の自席に座ることができない。専門医を受診しながら、どうにか校長室登校はできている。当初は不登校の理由が全く分からず、保護者も担任の対応も学校の組織的支援にも困難を極めた。

Bさん(五年生女子)は県外からの転入生であった。現在は市教委の特段の配慮により同市内の小規模校へ転校した。彼女も三か月程校長室登校が続いた。知的には高いが大人数の中での活動を極度に嫌った。ものは試しで行ってみた小規模校での体験が転校の決め手となった。

### 三 「児童支援専任教諭」に期待すること

学校規模や地域性等でも実状は異なると思うが、近年小学校における生徒指導に難しさを感じる学校も少なくないだろう。本校の場合、約十四%の児童が支援の可能性あり、約三%が日常的に何かしらの支援・対応が必要な児童としてリストアップされている。その他にも学校では突発的生徒指導事案は起る。外形的事象の背景を見取り、個別に丁寧な対応をするとなると担任や専科の兼務では大きな負担となる。

これは一つの例であるが、横浜市ではこのような現場の状況に対応するため、十年程前から市内の全小学校に生徒指導の専任教諭(児童支援専任教諭)を配置したという。専任教諭の存在により保護者の相談窓口の明確化や情報の一本化が図られ、関係者間の迅速な連携や組織的対応力の向上に効果を上げているという。専任教諭には相当のスキルと経験が求められると思うが、授業を受け持つ教師たちの負担軽減や業務の効率化も期待できるのではなからうか。

### 四 おわりに

一人気掛かりな児童がいる。既に二年以上登校できていない。昨年、担任は毎日自宅を訪問したが、結局登校させられず自身の無力さに涙した。教師も必死である。教師としての良心と情熱に頭が下がる。現在、出席扱いが可能となるリモートでの授業参加を勧めている。



## 教育活動（学校行事等）を考える

大黒小（隅） 下曾山 隆

新型コロナウイルスが全国で感染拡大し、全国一斉の臨時休業が実施されるなど、先行き不透明な時代である。学校が再開され、新しい生活様式がスタートした。臨時休業期間、各学校では、確かな学力の定着のための時数確保に係る教育課程の見直し作業に苦慮されたことと思う。そんな中、学校の在り方（教育活動）など、個々または組織で考えるいい機会にもなった。三年ほど前、猛暑が続き、熱中症対策が学校の喫緊の課題となった。その際、暑さ指数（WBGT）を参考に教育活動を実施したり、運動会の内容を見直したり、指数が高い日の昼休みに水分補給・休憩の時間の放送をしたりして対応したのを思い出す。温故知新、不易と流行：大切にしなければならぬことであるが、教育の本質、本当に大切なことについて考える必要があると思う。私見だが、日ごろ考えていること、感じていることをまとめてみた。

### 一 体育的行事

#### (一) 運動会

運動会は、最も大きな学校行事であり、体育に携わることも多かった若い頃は、入

場行進からスタートして「びしっ」という思いで指導してきた。しかし、数年前の残暑厳しく、熱中症対策が急務だった年には、大規模校では入場行進をカットするなど内容等を見直し対応した。これから先、過去に実施していた走る競技を中心とした「小運動会」的なものに移行していくのではと考えた。コロナ禍の本年度は午前中開催の学校も多かったのではないかと予想される。大規模校は、二グループ等に分けて実施したところもあったかもしれない。夏休みで乱れた生活リズムを二学期最初の運動会で改善する意義は大きい、一学期開催も視野に入れ、協議していく必要がある。

#### (二) 各種記録会

昔から各種記録会については、協議されてきた。各種スポーツクラブの発表の場になつていないか、練習時間の確保が難しいなど、要因はいくつかある。小さな市町村では、高学年全員が一種目は出場できるが、大きな市町村ではそうはいかない。以前は、朝・昼・放課後等の練習を重ねていたが、

## 二 その他の行事等

#### (一) 家庭訪問

現在のは数日間の放課後の練習のみがやっとである。各市町村で改めて協議する時期になつていると考える。

家庭訪問は、「地理的位置や家庭での様子などの把握、学校での様子等について保護者への連絡、保護者の疑問に答え、学級経営・指導方針等の説明、通学路の安全点検」などが目的である。多くの時間を費やし大切なことであるが、教育相談に変更したり、新入生・転入生のみ実施したりするなど改善・見直しができる。状況によっては、年度当初に教育相談、七月後半に家庭訪問ということも可能である。

#### (二) 宿泊学習

教諭（管理職時代、二十回近く宿泊学習で児童を引率した。自然体験活動を重視し、社会性・協調性・自律性の育成等を考えると、二泊三日は必要最低条件と考え、実施してきた。一泊二日を経験したことがない。しかし、昨今、引率者は、一晩中児童の対応に追われることが多くなり、睡眠時間が十分に確保できない現状もある。また、コロナ禍では中止したり本館研修を中心にした内容に変更したりするケースがほとんどだと考える。見直しの必要性を感じる。

\* 学校規模等実情によるところは大きいですが、目的・目標を明確にして、柔軟な発想でゼロから教育活動（学校行事等）を見直すいい時期だと考える。



## 地域と共に豊かな心を育む学校を目指して

### 〈農業体験活動を通して〉

中名小(市) 澤園 能史

#### 一 はじめに

本校は、明治九年に寺子屋として創設され、尋常小学校などを経て、平成十六年の合併で鹿児島市立中名小学校となった。校区は、錦江湾を臨む沿岸部に広がり、稲・麦・トウモロコシ・オクラなどの栽培が盛んな農業地帯である。国道二二六号・JR指宿枕崎線が南北に走っている。児童数は、横ばい傾向で本年度は、百二名、八学級である。地域コミュニティをはじめ、校区の方は学校にとっても協力的である。

#### 二 学校経営の方針

学校教育目標は、「ふるさとを愛し、確かな学力をもち、心豊かでたくましい『中名の子』を育成する」とし、「当たり前」のことが当たり前でできる学校」を合言葉に学校経営を進めている。その突破口として、「あいさつ・返事・後始末」の徹底を重点としている。

「あいさつ」については、「一学校一改革」と位置づけ、「先に・大きな声で・相手を見て・笑顔を添えて」のあいさつを奨励している。

また、学校教育目標の具現化を図るため、「知・徳・体・美・信」の五つの柱を明確にし、

具体策を設定している。学校評価は、この具体策を評価項目として振り返り、PDCAサイクルの流れを大事にしなが、学期ごとに確認している。

「形を整えることで、心を整える」ことも大切にしており、「残り姿」を意識した後始末など、全校体制で取り組んでいる。

#### 三 特色ある教育活動Ⅱ農業体験活動

校区内は農業が盛んであり、子どもたちには農業を体験して、思いやりがあつて人を大切にする人間になってほしいという地域の願いがある。学校では農業体験活動を総合的な学習の時間に位置付けて、三年生から六年生で実施し、指導や支援を地域の方々に依頼している。ここでは、六年生の「レタス栽培」について紹介する。

十六年前から地域農家の指導を受けて六年生がレタス栽培を行っている。九月初旬に校内で育苗箱に種まきをし、当番制で毎日水かけを行う。十月中旬に学校から徒歩五分ほどの場所にある約三アールの畑に苗を定植する。十一月下旬に収穫し、市内の飲食チェーン店や旅館へ販売する。販売収益で六年生が

#### 四 おわりに

一人一冊ずつ気に入った本を購入し、東日本大震災や熊本地震で被災された小学校などに寄付している。子どもたちは、「育てたレタスをたくさん食べてもらって、本を贈って被災地の人にも喜んでほしい。」という思いがある。昨年度は、この取組に対して「鹿児島県明るい社会づくりの会」から善行賞をいただいた。今年度は、第一回さつまっ子育成市民大会で実践発表を行うことになっている。

コロナ禍で、日常生活様式は大きく変化した。それに伴い、本校でも、運動会・修学旅行など、内容や時期の変更を余儀なくされた。地域でも敬老祝賀会・十五夜等、伝統的な行事が中止という苦渋の決断がなされた。それでも、子どもたちは前を向き、健気に毎日を懸命に取り組んでいる。

このコロナの経験から、学ぶことは多い。子どもたち一人一人がよりよい人生を送るためにも、変化に柔軟に対応する力、創意工夫する力、自ら考え行動する力など「生きる力」をこれからも一層育むことの大切さを感じている。

また、こんな時代だからこそ、地域とのつながりについて改めて考える機会にもなった。地域の宝でもある子どもたち。中名地域コミュニティ協議会は、平成二十四年に発足し、地道な活動を続けている。学校と地域が共通なビジョンをもち、郷土を愛し、将来を担う子どもたちの育成に今後も努めていきたい。



## コロナ禍における学校経営

清水中(市) 竹之下 浩 徳

### 一 はじめに

新型コロナウイルス感染症は、これまでの生活様式を一変させる世界規模の災禍となり、学校教育においても全国一斉の臨時休業や各種大会・コンクール等の中止など異例の事態となった。トンネルの出口が見えず長期的な対応が求められる状況となっている。

このような中、持続的に児童生徒の教育を保障していくため、学校における感染及びその拡大のリスクを可能な限り低減した学校運営について、現在取り組んでいること、また、今後取り組みたいことなどを交えながら、考え方を整理した。

### 二 感染および感染拡大のリスクの低減

#### (一) 学校行事等の見直し

大人数が集まり、長時間「密」の状況となりやすい学校行事は、感染リスクの度合から次の三つに区分し、それぞれに対応を検討することとした。

A 比較的リスクが低く、当初の計画どおり実施できるもの

B 実施の時期や方法を工夫しても行事

本来の目的が概ね達成できるもの

#### C 実施困難なもの

Aとしたのは定期テスト等、ごく限られたものである。また、学校内部で完結する行事等はBとし、ICTを活用したり分散で開催したりするなど、それぞれの行事の特性に応じて実施することとした。なお、Cは、職場体験など外部と関係する行事等である。

#### (二) 本校の工夫例

- ・ 高校説明会。高校ごとにブースを設け、希望する学校の説明のみ聞く方式に変更し、各ブースの人数を抑えて実施した。

- ・ 体育大会。一・二年生は、予行日に、それぞれ二時限ずつ、保護者参観のもと、プレ大会として実施。大会当日は、三年生と選手種目中心のプログラムとし、参観は三年及び選手、応援団の保護者に制限、昼食なし。結果、例年とはほぼ同じ内容で実施できた。

- ・ 全校朝会、始業式、生徒会行事等、全校生徒が集まり実施するものは、体育大

#### (三)

会以外すべてリモートを導入し、文化祭についても直接鑑賞するのは、舞台発表の学年とその保護者のみ、他学年は教室でリモート鑑賞とすることで、体育館の人と空気の入替えを図る。

#### その他

- ・ 衛生面向上のため、蛇口の回転式ハンドルをレバーに付け替えることを検討
- ・ 手洗いの習慣化のため、二校時の休み時間に五分間音楽を放送
- ・ 感染対策の観点に沿って班活動を行う際のグループの作り方、距離、時間等のルール化
- ・ メールを活用したPTA連絡体制の強化(アンケートの実施、自動集計もメールを活用)
- ・ 水筒持参の通年化

#### 三 おわりに

一連の対応を行う中で、代替案としてとった方策にも様々な良さがあることに気付いた。例えば、各種集会等のリモート開催は、発表者や被表彰者等の顔がよく見える、移動時間が短縮されるなど、今後も導入を検討する価値を見出すことができた。

コロナの影響で様々な制限を受けるといふ負の意識から、ややもすると前例踏襲、固定観念にとらわれがちな学校教育を根本から見直すための良い機会であると自身に言い聞かせ、今後も、コロナ禍における学校経営を前向きに努めていきたい。



## 故郷に学び、持続可能な社会を

### 創造する子どもたちの育成

小瀬田小(熊) 西牟田 司

#### 一 はじめに

本校区は屋久島町東端に位置し、小瀬田地区と長峰地区の二地区からなっている。

校区の南西側には屋久島の連山が迫り、世界遺産登録地に指定されている標高一二三五の愛子岳がそびえている。また、山岳信仰としての「御岳参り」を始め、「銭投げ」や「四つ竹棒踊り」などの伝統行事が大切に受け継がれている校区である。

本校では、このような自然、伝統文化が豊富である校区の特性を十分に生かし、屋久島型ESDの視点をもった小瀬田小学校ならではの特色ある教育を実践している。

#### 二 取組の実態

##### (一) 郷土芸能「四つ竹棒踊り」の継承

四つ竹棒踊りは、現在もお盆に供養のために舞う郷土芸能の踊りである。男女とも、浴衣に紅白のたすき掛けをし、左右の手の親指と中指にそれぞれ拍子木型の竹、計四つを付けカチカチ打ち合わせながら棒を使つて舞う。踊り子は、小・中学生、高校

生、保護者、地域の方々で、校区内の神社やお寺に踊りを奉納し、初盆の家々を回り、最後は小瀬田の共同墓地で大勢の見学者の前で踊る。

子どもたちは、例年、校区の保存会の皆様の指導により、地域や学校で一学期から練習を重ねている。学校では、毎年運動会表現種目の一つとして、保存会の方々の温かい指導の下、三年生以上の子どもたちが踊ってきたが、本年度は全校表現種目として、保護者や地域の方と皆で踊ることにしたところ、例年になく大勢の参加者をいただき、大いに賑わった。

このような伝統芸能を継承する地域・学校が一体となった活動が、地域の歴史の学びにつながり、子どもたち・保護者・地域・学校の相互の結び付きを深めている。

##### (二) ツマベニチヨウの飼育

ツマベニチヨウ(棲紅蝶)は、鱗翅目シロチョウ科の一種であり、日本では九州が分布の北限である。羽の先端があざやかな

オレンジ色の蝶であることからこの名がある。羽の開帳九〜十cm程度。日本産のシロチョウ科では最大の種で、春から秋にかけて年四〜五回派生し、産卵からおよそ三〇〜四〇日で成虫になる。サナギまたは幼虫で冬を越す。飛び方は速く、高く飛ぶので、花を訪れるものの他は捕まえにくい。

屋久島でこの蝶の飼育設備を持っているのは本校のみである。平成二十九年に建設され、本校の特色あるESD教育として、主に高学年児童の総合的な学習の時間で、卵から成虫になるまでの飼育学習を実施し、三年生以上参加の委員会活動で飼育舎の環境整備を行っている。十数頭の蝶が乱舞する姿は圧巻で美しく、皆で観賞している。

##### (三) 低・中学年の主な取組(生活科、総合)

- 第一学年「おとこがわへ いこう」
- 第二学年「町が大好き探検隊(えび養殖所、神社等)」
- 第三学年「屋久島の漁業を調べてくわしくなろう」
- 第四学年「学校の周りの自然について調べよう」

#### 三 おわりに

このような学習を通して、子どもたちは、屋久島という豊かな自然に恵まれた環境の中で、環境に対する人間の責任や役割を理解し、持続可能な社会づくりの担い手として、相応しい能力や態度を身に付け成長している。



## 郷土に自信と誇りを持つ子どもたちの育成

### 「あまみの子どもたちを光に」

緑が丘小(大) 菊池 悟

#### 一 はじめに

本校は、昭和三十八年に笠利町立喜瀬小学校及び用安小学校が統合され、現在の奄美市立緑が丘小学校として誕生した。今年度は創立五十八年目を迎える。統合当時は二百五十六人いた児童数も、今現在二十三人という複式学級を有する小規模校となっている。

少人数ではあるが、一人一人が個性に溢れ輝いている。この子どもたちが、郷土を知り、郷土に自信と誇りをもつことと「学ぶ意味・意欲」をつなげていくことによって、いつしか郷土の発展・振興に積極的に関わっていくこととする強い信念が生まれ、そのことが自分の「夢・希望・志」となっていくことを願いつつ日々の教育活動に取り組んでいる。

#### 二 郷土素材を生かす

##### (一) バードウォッチングを通して

平成二十九年度に県の『愛鳥モデル校』として指定され、現在も取り組んでいるのがバードウォッチングである。奄美野鳥の会のメンバーの方々を毎年講師として招聘し、御指導いただいている。本校周辺には

世界中で奄美のみ生息する国の天然記念物であるルリカケスやオーストンオオアカゲラなどが生息し、その他アカシヨウビンやサシバなども渡来し、現在二十種類近くの野鳥を確認できている。野鳥の宝庫と言っても過言ではないこの自然環境下、子どもたちもこうした活動を通して多くの野鳥を判別し、名前も覚えてきている。そして自慢げに見かけた場所や特徴を語る時、子どもたちの目が輝いている。

##### (二) さとうきび栽培・黒糖作りを通して

奄美の基幹産業の一つである黒糖栽培を「総合的な学習の時間」を活用し、五・六年生が取り組んでいる。黒糖栽培の歴史的背景から先人の知恵や精神的強さを学び、実際にさとうきびを育て、その絞り汁から黒糖作りまでを体験している。指導者は地域の方々である。特に子どもたちが楽しみにしているのが黒糖作りである。大鍋にサトウキビの絞り汁を注ぎ込み、沸騰させ、いくつかの行程を通してだんだんとねばりが出てきて甘い香ばしい香りがその場を包み込む。棒でかき混ぜるタイミンと混ぜ方

において仕上げるポイントがある。そうして苦労してでき上がった黒糖を温かい間に口に入れた時、子どもたちの笑顔が広がり、子どもたちの目が輝く。

##### (三) 伝統芸能・島口活動を通して

子どもたちは運動会や音楽発表会等において、島の伝統芸能である八月踊りに乗せて島唄、三線やチジン(太鼓)を披露している。その音色や歌詞、踊りは島固有のものであり、それらから先人たちの思いやその当時の生活が伝わってくる。指導者は、地域の八月踊り保存会の方々であり、子どもたちは朝の会や音楽授業の中で御指導していただいている。

また、歌詞は勿論島口(島の言葉)であり、この島口についても高齢者との交流や島口カレンダー(島口教訓)を活用して学び、先人の生き方や知恵を学んでいる。

#### 三 おわりに

令和二年一月三日『奄美市笠利地区成人式』に出席した折に、新成人者代表四人の意見発表を聞くことができた。その四人の発表者に共通していたことは、郷土奄美への自信と誇り、そして、関わっていただいた全ての方々への感謝の思いとその絆の深さ。いずれ奄美に貢献できるような人物になりたいと思う決意の強さなどを述べていた。その一言一句に心から感銘を受けることができ、今後の学校教育の中で、こういった輝きを持った若者を一人でも多く育てていかなければならないという思いが強く心に刻まれる機会となった。



「故郷は心の中にある」

附属小(市) 池 浦 也 寸 志

配置面接の際、旧隼人町の教育長先生から「君は、出身も鹿児島ではないから赴任した所を故郷だと思いなさい。」と言われた。教員になりたての頃、「おはんは、どこの出身ね。」と聞かれることが多かった。次に聞かれることは、「なんで、鹿児島に来たの。」だった。私は、福岡市に生まれて育ち、縁あって鹿児島県の教員として採用となり、これまで、旧隼人町、鹿児島市(三度)、旧笠利町、阿久根市、出水市と転勤し、転勤の度に同じように聞かれた。この頃は「私は、福岡市の出身で〇〇の地とは縁もゆかりもございません。」とまず答えるようにしている。だからといって最初から喧嘩を売っているわけではない。これまでの転勤の経

験から、転勤した先を故郷と想い、その土地、人、文化を知り、地域にどれだけ根差すことができるか、その土地での生活をどれだけ楽しむことができるかが大切だと考えている。これまで、家族を伴って転居してきたが、転居先の土地で家内や子どもたちに大いに助けられた。まず、子どもが学校に慣れ、友達もできるようにすると家庭も落ち着いてくる。次に地域の行事等にも子どもの参加を通して、積極的に関われるようになってくる。一番下の子(小学校低学年の頃)は、奄美の笠利を去る際、「奄美の男に生まれたかった。」と言って、集落の人々に感激されたほどである。

鹿児島に生まれ育った人でも故郷の学校に勤めることは、そうあることではあるまい。そう考えると私のような者にとって、鹿児島出身でないがゆえに行く先々の土地を故郷と想い、何とかして地域に根付こうと努力してこれたのだと思っている。「故郷は遠くに在りて想うもの。」という言葉もあるが、私には「今、暮らしている土地こそが故郷。」という想いを持ち続けるとともに「置かれた土地で花を咲かせたい。」と思っている。それぞれの赴任先が私には故郷として心の中にある。

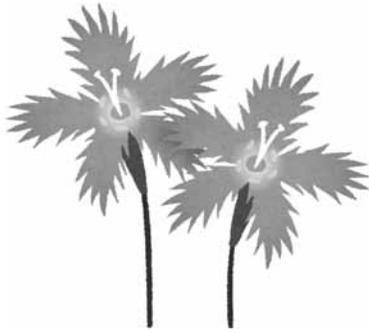
「思いを胸に」

宮脇小(南) 竹 迫 芳 朗

言葉には、希望への架け橋となったり、怒りや悲しみを和らげたり、人を突き動かす力があるとされる。今大人気の鬼滅の刃で主人公が使う「全集中、水の型」というワードが医療現場で大変役立っているという記事を目にした。「全集中だよ。」と子どもに言う注射等の際に「深呼吸、落ち着いてということだよ。」ということが伝わり、注射等がしやすいそうである。正に人を突き動かす言葉の力を今の子どもたちに発揮している。

このように自分が突き動かされたのは、派遣社会教育主事として異動が決まった際先輩、そして今は亡き教育長先生の言葉であり、今も鮮明にその当時のことが思い出される。先輩の言葉は、異動発表後近寄って来られ「僕もやりたかったな、おめでとう。」という、ひとことである。尊敬していた先輩だっただけに、やりたいという思いのある人ができず、自分がその任に就く責任を強く感じたことを思い出す。同日校長に連れられ教育長先生にあいさつに行く、「今からは君みたいな人もやらないといけない仕事だからね。」と言われた。自分が怪訝

な顔をしていたからだろうが、続けて「変な意味じゃないんだよ。今から前面に出て引張るだけじゃなく下支えが大事なんだよ。」という言葉をいただいた。自分の性格を見取り、不安を払拭するための励ましの言葉に教育長先生の温かい思いを感じ取った。その後も、自分でいいのだからかと思いつつも、いろいろな仕事をさせていただいた。難儀なこと、心が折れそうなこと等があっても、その都度関わってくださった方々の様々な思いがあって今の仕事を与えられていることを強く心に刻めていたから、なんとかその任を勤め上げられたと思っている。残り少ない教職生活だが、人を突き動かす思いのある「ひとこと」が語れることを目指して日々研鑽したいと思っている。



## 「小さな汗を」

里中(北) 柚 木 義 哉

「小さな汗をかける先生にならんとなあ。」私にとつて心に残る大切なひとことである。そして、この言葉は、「小さな汗をかかないと、その後に大きな汗をかくことになる。しかも残念なことに、その大きな汗はほとんどが報われないものだ。」と続く。

私の初任校は、いわゆる生徒指導困難校であり、担任や生徒指導主任の先生方が毎日のように子どもたちの対応に追われていた。新採の私は、まさに中学校の現実というものに直面し、戸惑ってばかりいた。

そんなとき当時の教頭先生が、生徒指導の事案対応を一緒にしながらかけてくださった冒頭のこの言葉は、私の教員生活において常に根底に刻み込まれている言葉となっている。

その後、担任として、生徒指導主任として、そして、教頭となった時、また、児童自立支援施設内学校に勤務していた時等々、どのようなステージであったとしても、経験を重ねることに、その重みは増すばかりである。

「小さな汗」とは、教科指導においては、教材研究や日々の授業の振り返りであり、生徒指

導や保護者対応においては、日頃の積極的な生徒との関わりや、保護者への事前の説明である。また、組織として物事を進める際の「予め（あらかじめ）」こそ、「小さな汗」であることも身に染みてわかるようになった。

毎日のようにいろいろなドラマが起こるのが学校現場ではあるが、事前に「小さな汗」をかって備えていれば想定内で収まり、そうでなければ、想定外となってしまうことが多い。

学校を預かる責任者となっている今、この「小さな汗」を私自身がしっかりとかくこと、そしてそのことが、「小さな汗を大切にする」職員の集団づくりにつながると思っている。

さらに、私に教師としての在り方の礎を授けてくださった恩師ともいべきこの教頭先生のように、次の世代の先生方へ何かをお伝えでき自分になれるよう精進してまいりたい。



## 「一期一会」「生と死」、 これまでとこれから

名瀬中(大) 外 西 一 彦

これまで中学校や市町村教育委員会、青少年教育施設など様々な職場を経験させていただき、教職生活三十二年目を迎えた。校長職の拝命とともにスタートした二度目の離島勤務も三年目となったが、これまでは職務を全うすることに精一杯で教職生活を振り返る余裕などほとんどなかったような気がする。

今回、このような機会をいただき、これまでをじっくり振り返ることができた。そして、これからのことを深く考えたり感じたりすることができたことに感謝しつつ、自戒の念や決意も込めて二つのことを記したい。

一つは、「一期一会」についてである。これまでで出会った人々は、生徒や保護者、上司や同僚、施設の利用者など数え切れないほどであるが、果たして、これらの人々との出会いをどれほど大切にしてきたであろうか。

時に、心が不平や不満に支配され、公平さや誠実さを忘れ、人との出会いを素直に感謝できずに、不遜であったかもしれない。

これからは、全ての出会いに心から感謝する

とともに、謙虚に喜び、誠意と熱意をもって互いの信頼関係や絆をより豊かなものにしていきたい。

もう一つは、「生と死」についてである。これまででは、生きることや死ぬことについてことさらに考えることはなかったが、病を得たことで後悔や不安、恐怖など様々な感情を抱くようになった。そのようなとき、立ち寄った書店で松下幸之助氏の著書「道をひらく」を手に取った。その中に「生と死」について、次のようなことが記されていた。

「死を恐れるのは人間の本能であるが、死そのものを恐れるよりも、準備のないことを恐れた方がいい。人はいつも死に直面している。それだけに、生は尊い。だから、与えられている生命を最大に生かさなければならぬのである。」

この言葉は、私に生きるこの意味を真剣に考えながら日々の生活を送ることの大切さを教えてくれた。

これからは「生きる目的」を明確に持ち、一日一日を大切に丁寧に生きていくことの尊さを胸に刻み、真に充実した生き方のために強い気持ちで病に立ち向かっていきたい。

## ある日の校長講話



### 「誕生日おめでとう」

阿久根小(北) 秦 明 夫

児童数百二十人ほどの前任校での十月下旬の全校朝会の講話です。

皆さん、おはようございます。校長先生は、四月から誕生日を迎えた人を校長室に招待しています。今、六十八人来てくれました。今日は、どうしてそんなことをしているのか話したいと思います。

校長先生の誕生日は二月八日です。誕生日はふつううきうきするはずですが、この時は、仕事が多忙しくて少し疲れていました。「いつものように元気を出さないといけないぞ。」と自身に言い聞かせながら、校長室で仕事をしていました。

そんなときでした。「入ってもいいですか。」

と三年生の男子二人が校長室に入ってきました。そして、「校長先生、誕生日おめでとうございます。」と言って、この恐竜の折り紙をくれたのです。予想もしていなかったので、とつてもうれしかったです。そして、とたんに元気が出ました。

校長先生は、皆さんにミッションを出していただきましたね。「だからのためになること、だれかが喜ぶことをすること」でした。校長先生も同じように皆さんが喜ぶことができなにか、いつも考えていました。でも、何をしたらよいかなかなか思いつかないでいたのです。そんな時、この折り紙をもらったのです。この時、「そうだ、誕生日を迎えたお友達に誕生日おめでとうを言おう。」と心の中に決めました。

このようなことがきっかけで、校長室に招待するようにしたのです。校長室に来てくれた人には、カードに誕生日を迎えてがんばりたいことや将来の夢を書いてもらって、校長室に飾っています。また、夢の文字を入れた手作りのキーホルダーをプレゼントしています。「夢と目標をもつこと」は、もう一つの皆さんへのミッションでした。夢について話をしてくれる皆さんからまた校長先生は、元気をもらっています。

## 「NIE活動を楽しみましょう」

野神小(隅) 小島 ユキエ

皆さん、職員室の廊下に水槽が置かれていることに気付きましたか。水槽の中には白黒まだらのウナギが二匹います。これは、ダルメシアウナギまたはバンダウナギと呼ばれているウナギです。六万匹に一匹しかない貴重なウナギなので繁殖されている方が、皆さんに知ってほしいと学校に持ってきてくださいました。この珍しいウナギを是非観察してみてください。

そこで、珍しいウナギを学校で飼っているというところで新聞社の方が取材に来られ、先日記事になりました。家の人と一緒に記事を読んだ人もいると思います。ウナギと観察していた人の写真も載り、新聞をととても身近に感じましたね。

さて、皆さんは、土曜授業の朝にNIE活動に取り組んでいますね。実は、六年生はこのウナギに出会う前に「ウナギ稚魚、天然海水で生産」という記事を読んで感想文を書いていました。ウナギの天然稚魚が絶滅の恐れがあることから沖永良部にある研究所で稚魚の人工生産に成功したという記事でした。ある人は「私のお父さんは、ウナギを育てる仕事をしています。

でも、人工稚魚ではありません。ニホンウナギが今、減ってきています。人工稚魚の生存率をどんどん上げてニホンウナギを未来まで残してほしいです。」と書いていました。他には、ウナギの値段やシラスウナギのことを考えた人もいました。同じ記事を読んで友達と意見を交換できると、さらにお互いの考えが深まり、楽しいNIE活動になることでしよう。

多目的室には、皆さんがいつでも読めるように今日の新聞が置いてあります。また、保健室前のNIEコーナーでは、スポーツや動物など楽しく読んでほしい記事を紹介しています。NIE時間だけでなく、いろいろな活動で新聞を読んでもみましょう。びっくりしたり、おもしろかったりした記事を見つけたら、お友達や先生方にも是非教えてくださいね。



## 「人権から見える二つの自由」

安良小(始) 濱 田 有 希

皆さん、今週から終業式までの期間は「人権旬間」です。取組スローガンは「語ろう」「知ろう」そして、「つなごう」です。五・六年生の皆さんは、先週人権教室があったばかりですが、今日は皆さんに幾つか質問をします。

一つ目は「人権とは何でしょう?」すぐさま子どもたちは「人が人らしく生きる権利」や「人間らしく生きる権利」と元氣よく答えてくれました。それでは「人と人間の違いは分かれますか?」この質問には返答がありませんでした。人とは「個々、すなわち人柄」を表し、人間とは「人の集合体、すなわち社会的存在」を表しています。つまり私たちは、家族や学校、地域社会の中でどう生きるかが大切になってきます。二つ目は「権利とは何でしょう?」この問いに一人の子どもが「自分で決めてできること」と発表してくれました。権利とは「自分の意思によって自由にできること」と伝え、すかさず「自由とは何でしょう?」と、三つ目の質問をしました。子どもたちは「好きなことができること」と「あちこちから回答がありました」。

私は「そのとおり!」称えた上で、「自由に

はもう一つの意味があります。分かれますか?」と問いかけてみましたが、手は挙がりませんでした。もう一つの自由とは「嫌なことや、されたくないことをしないこと」です。

オーストリアの精神分析学の創始者で精神科医のジークムント・フロイトの言葉に『ほとんどの人間は実のところ自由など求めていない。なぜなら自由には責任を伴うからである。みんな責任を負うこと恐れているのだ。』とあります。もう一つの自由「自分がされたくないことや、言われたくないことをしない」ということは、「自由には責任を伴う」ということを意味しているからでしょう。

改めて「人権」について考えたとき、「人が人らしく生きる権利」として私たちが忘れてはならないことは、相手の立場を考え、それぞれを尊重することが何より大切であるということです。私たち大人はもちろんのこと、皆さん一人一人が相手の気持ちを大切にしながら、みんな仲よく、そして楽しく過ごせるように心掛けてまいりましょう。



### ちよつとした

思いやり

花徳小(太)

石川 雅 実

もよくそこを通っていた。

ある日、友人と河原のベンチで休んでいると、幼稚園児らしい五、六名が目の前を歩道を走って通り過ぎた。すると、最後の男の子が、勢いあまって転んでしまった。案の定、大泣きとなった。幼稚園児の誰かが引き返してきてくれないかなと、様子を見てみると、一人の女の子が駆け寄ってきた。私はよかつたなと思った。きつとあの女の子が、男の子を介抱してくれると思ったからである。すると、女の子は、意外な行動をとった。私の期待はよい意味で裏切られた。

女の子は、何も言わず、ただ男の子の横にちよこんと座っていたのだ。ほんの少しの間だったと思うが、男の子が泣き止んだ瞬間に、「行こ

う。」と言って、一緒に走っていった。男の子も、何事もなかったかのように、元気に前にいる友達をまた追いかけた。

私は、すごい女の子だと感心した。よく考えてみると、泣いている子に、優しい言葉をかけると、ますます悲しみが増すものである。その女の子は、そういつた経験をしていたのかも知れない。ひとしきり泣き、落ち着いたと思われる絶妙なタイミングで「行こう。」の一言。なんと思いやりのある行為だろう。

人間の道徳性は、他律から自律へと向かう。そうだとすれば、大人と呼ばれる人は、道徳性が幼い子供たちより優れているはずである。しかし、実際はどうだろう。先程の女の子のような行為がはたしてできるのだろうか。

「小さな親切、大きなお世話」と言われることもある。他者に対する思いやりのある言動は、とても難しい。だからと言って、他者への親切をためらってはいけないと思う。相手のことを、自分事として考える経験を、子供たちに多く積ませたいものだ。善なる「気づき、考え、実行」ができる子供の育成に力を注ぎたい。小さな子供の何気ない言動から多くのことを学ぼうとする教師、大人でありたいと思う。コロナ禍の昨今、そんなことを考えた。

## スターティング

### オーバー

西紫原小(市)

池田俊彦

ミスターチルドレンというロックバンドがある。レコード大賞を二度受賞したといえ、詳しくない方にもメジャーなバンドだと理解してもらえるだろう。

このバンドに「スターティング オーバー」という楽曲がある。永年、彼らを支えてきたプロデューサーと袂を分かち、オリジナルメンバーだけで制作したアルバムに挿入されている代表曲である。ボーカルの櫻井和寿は「もう一度、自分たちの音楽の原点に戻るためであった。」と語っている。

ビートルズのジョン・レノンにも同名の楽曲がある。ビートルズが解散し、ジョンが五年間の沈黙を破って、ソロ活動を始める時のアルバムに挿入されている。

「スターティング オーバー」とは、「新たな旅立ち」「再出発」といった意味である。櫻井もジョンも、それまでの十分すぎる活躍や栄光に頼って生きていくことを良しとせず、新たなスタートを切るという選択をした時に、期せずして「スターティング オーバー」という曲を創ったのである。彼らの決心の証の楽曲でもあろう。

世阿弥の『老後の初心忘るべからず(花鏡)』にも通ずるように思われる。有名な言葉であるから、改めて説明するのは憚られるが、「老年

期になって初めて行う芸というものがあり、初心がある。年をとったから完成したということはない。」ということである。

校長職も正に「スターティング オーバー」ではなからうか。校長だからできる仕事、校長でなければできない仕事がたくさんある。教諭、教頭、行政職として積み上げてきた実績や経験は、一旦引き出しの奥にしまい、校長としての初心をもって、「スターティング オーバー」を歩み出したい。私自身は二校目の校長であるが、ここにはまた一校目とは異なる初心が求められている。

校長職はあがりではない。  
「スターティング オーバー」だ。

## 初任を振り返り

鹿児島水産高等学校

立石 仁志

「おまんが、好きなようにやったらいいんや！何かあればわしに責任はとる！」私は四国の高校に初任者として赴任した。文部科学省から生徒指導困難校の指定を受けているだけあって人を信じることができない、家庭的にも愛されていない生徒も少なくはなかった。授業中に弁当を食べたり漫画を読んだりが当たり前のようになっており、年間の生徒指導の件数も二五〇件を超える状況にあったが、船から降りたばかりの私にとって驚くことではなかった。生徒たちは、信

頼関係が築ければ絶対に裏切らない、男気があり人情味のある生徒たちばかりで、そんな生徒たちが私は大好きだった。赴任した年のある夏の夜、生徒から電話がかかってきた。「先生ありがとうな〜」、私は「ありがとうつて！どうゆうことよ！」と聞き返した。「単車で爆音をあげ走り回っていたら（俗にいう暴走族）警察官に補導され警察署にいる。学校の指導がもう六回目なので退学になるから、ありがとうを言いたくて」という内容だった。私は約二〇キロメートル離れた警察署へ車を走らせた。（何のために何をしようと思つて車を走らせたかは想像にお任せするとして）、一〇分くらい車を走らせただろうか、本人から「大丈夫です。」との連絡が入った。警察が配慮してくれた様子だった。いろいろなことで生徒に寄り添い解決できることやできないことがある中、信頼している校長に「校長先生！私は生徒のために何をどれくらいやつたらいいんですか？」と尋ねた。校長は「生徒のためにどれくらいやればいいのかという答えはない！おまんが好きないようにやったらいいんや！何かあれば責任はわしがとる。」と答えてくださった。船乗りとして漁船に乗り込み、逃げ場のない世界で様々な人間関係や上下関係を勉強させていただいた私にとって、温かく衝撃的な答えだった。この人についていく、生徒のためにとことんやってみよう、という気持ちからさらに強くなるとともに、私も将来はこの人のような管理職になりたいと思つた瞬間だった。あれから三〇年、私はそんな校長になれてるだろうか？

## 読書案内



■五木寛之 著

### 選ぶ力

申良小(隅) 福留憲 一

以前仕えた教育長の口癖は、「人生は選択の連続である。」という言葉であった。研修会場で、目の前に座る管理職に対し、「今日、ここまで来るのに、どのネクタイを手にし、何時に出て、どの道を通つたのどり着いたのか。全て選択の連続だったのでないか？」と話されるのであった。そして、「学校は生きている。どう選択していくかは先生方にかかっている。」と付け加えるのであった。私はその時、「なるほど、考えてみれば何をすることも、何らかの選択をしながら生きているんだ。」と、強く意識するようになった。

本書では、選択の余地がないものとして、どの国に生まれるのか、どんな親のもとで生まれるのか、どんな個性（性別、容姿等）で生まれるのか、肌の色はどうなのか、どんな時代に生まれるのか；等々を挙げ、与えられた運命を無条件に受け入れないといけないこともあるとしている。しかし、生まれてからどう生きていくかは、程度の差はあるものの、結果的にはほとんど自分で選択していることになると述べられている。

しかし、この「選ぶこと」が非常に難しい。例えば、健康のためにタバコを吸わなかったり、止めたりすることを選択した方も多いと思うが、毎年数万人発生する自殺者のほとんどはタバコを吸わない方であることを知ったり、「酒は百薬の長」として飲酒を習慣にしている方も多いと思うが、ごく少量のアルコールでも脳が委縮してしまうなどの話を聞いたりすると、何が正解か分からなくなってしまう。というよりも正解はなく、自分で選んだことが正解だと思ふことが大切なかもしれない。

今こうして、この文書を書くことになったのも、「鹿児島の教育」の項目の中で、自分の想いを伝えるには「読書案内」が最適と考えて選択したものだったし、この「11月号」が出る頃に、県大会で発表することになったのも諸般の事情から選択したからである。これらのことも正解だったと心に刻み込まなければ、毎晩ヤケ酒になってしまうであろう。

本書のあとがきに、「選ぶことも、選ばれることも、思うままにはならない世の中なのだ。そのことを覚悟しておきさえすれば、自分で納得のいく日も、幸せを感じる瞬間も、きつとあるのではないか。」と述べられている。そう考えると、人生思うようにいかないことも想定しながらも、これまでの自分の経験値をフル稼働させながら、一つ一つ選択し、納得していくことが最終的には自分の幸せにつながるのではないかと思っただ次第である。

さて、今夜の焼酎の肴は鶏刺しにしようか、カンパチの刺身にしようか思案のしどころだ。そうだ！どっちも選んじゃえ！

文春新書 八〇〇円＋税

## ■五木寛之 著

### 「こころの相続」

吉松中(始) 富 吉 等

「相続」という言葉は、お金や土地などの「モノ」をイメージされ、本著では、財産や資産といった類いだけが相続の対象となっていること

に一石を投じていることから始まる。著者は、自身の生い立ちや体験談、記憶を通して親からの相続を考えさせられるエピソードを紹介し、日常の習慣や作法も親や家からの相続であり、相続には、個人の癖やマナーなど個人から個人へのものだけでなく、文化や風習、国民性のように集団から集団へのもの、絶やしてはならないものまで含まれていると言う。また、語り継ぐべき「記憶の相続」として、災害の教訓や忠告などの危機管理、風化する戦争体験や戦争が引き起こした悲劇の相続の重要性を語る。

私自身、両親から相続したものを振り返ってみると、いくらでもあることに気付き、生活習慣のように身近なものから大きなものが体に残り、自分を支えてくれたことを再認識させられる。「こころの相続」が難しくなってきた時代だからこそ、親や子の役目として、「子を持つ親は生前にできるだけ多くの自分の歩いた道を物語らねばならない。幸いにして健全に両親を持つ者は、無理にでもそれを語ってもらうこと」とも著者は説く。

そして、大いに語り、耳に残し、文字ではなく肉声(音)で伝えること、語り継いで意識化することの重要性を歴史を紐解きながら述べている。

本著は、「こころの相続」とは何か、無形の相続をどう捉え、考えていくべきなのかを示してくれる。自分が親や家、社会から何を相続してきたのか。次の世代に何を相続し、伝えてい

くのか。改めて見直すべきだということを気付かせてくれる。社会全体のデジタル化が急速に進み、個人によつて語り継ぐことが少なくなつた今、改元の時代、昭和、平成を生きてきた私たち世代への提言ではないだろうか。両親が健在なうちにもっと早く読みたかった一冊である。さて、私は、子どもたちに何を相続させることができるだろうか。

S B新書 八六〇円＋税

## ■ブレイディみかこ 著

### ぼくはイエローでホワイトで、 ちやんとブルー

平島小・中(郡) 池 本 勝 志

この本は、だいぶ話題になったので、読まれた方も多いのではないかと思えます。私も「今話題になつてから読んでおかなくてはな。」ぐらいの気持ちで読み始めました。

筆者のブレイディみかこさんは、アイルランド出身で大型ダンプの運転手をしている配偶者とともに、英国南部のブライトンという街で

二十年以上過ごしています。この話は、中学生になる息子の身の回りに起こる出来事を綴っています。筆者の目を通した子育て経験という形をとっているのです、書きぶり自体は柔らかく、とても読みやすいのですが、そこで起こる出来事は、人種差別をはじめとするさまざまな差別、貧困による格差の問題など、今、現実が起こっている非常に重い問題です。これらの問題に対して息子は真正面からぶつかり、自分なりの答えを出していきます。小・中学校とも学習指導要領が改訂され、変化の大きなこれからの時代に、自ら課題を発見し解決していく力、グローバルな視点が求められている今、最も望まれている子どもの姿を見たように思いました。

しかし、一方で、私自身は今、世界で起こっている出来事をほとんど分かっていないということも実感させられました。新聞やニュースなどを通して知っているつもりでいたことも、そもそもその情報の選択や解釈が偏っていれば、非常に狭い一方的な知識になってしまいます。何も知らない自分があるに怖くなったので、それからいくつかわる本を読みました。

これまで、学習指導要領改訂にあたり、その意図や方向性などについて、色々な資料を読む機会がありました。しかし、実際に世界で起こっていることや、日本はどのような状況にあるのかということについて、しっかりとかなだ上で指導に当たらなければ、本当に子どもに身に付けさせなければならぬ力や、導いていかなければ

ればならない方向性を見誤ってしまうということも気付かせてくれた本でした。

新潮社 一、四八五円



■岩崎 夏海 著

## もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら

東串良中(隅)有馬 雅彦

この本は、みなさんも一度は手にしたことがある本ではないだろうか。発行部数三百万部ともいわれるベストセラー小説である。

私がこの本と出会ったのは、もう十年以上前のことになるが、教頭時代、「学校という『組織』とは何だろう。」とか「組織を円滑に運営するにはどうすればいいのだろう。」とか悩んでいたときに、娘が読んでいるこの本が目にとまった。当時は実用書中心に読み、小説を読むということがあるかないか自分であったが、これは一晩で読み終えてしまった。なぜそんなにこの本に惹かれたのか。それは、分かりやすさだと思う。実は、この本を読み終えた後に、ドラッカー

の「マネジメント」を読んでみたのであるが、私の頭では理解するにはそれなりの時間が必要であり、最後まで読み切るのが少し苦痛だった。しかし本書は、第八章以外に「マネジメント」の引用文があり、それをとても分かりやすく、女子高生マネージャーとまわりの高校球児たちが行動することで解説してくれている。また、企業とかでなく野球部というところも魅力的である。いろいろな組織で応用できる感が素晴らしい。

中学校では、来年度から新学習指導要領が完全実施になる。そして、今まさに来年度の教育課程の編成が始まったところである。新学習指導要領に「カリキュラム・マネジメント」の重要性が示してあり、「教科横断的な視点」で、「PDC Aサイクルを確立」し、「人的物的資源の再配分」によって、「なにができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を学校独自でマネジメントし、生徒に身に付けさせたい資質や能力を明確にし、かつ計画的に育成していかなければならない。

これからの校長は教育者というだけでなく、リーダー・経営者としての役割も果たさなければならぬ。微力ではあるが、この女子高生マネージャーのようにがんばっていききたい。

ダイヤモンド社 一六〇〇円＋税

中学生の頃だったか、自分の名字にコンプレックスのようなものを感じた時期があった。

私の名字「黒木」は、南九州、特に宮崎県に多い。旧字体「黒」の方もいる。読みも「クロギ」「クロギ」の二とおり。川内高校に勤務したとき「僕は先生と違って『クロギ』です。」とわざわざことわりに来た生徒がいた。

何がコンプレックスだったのか、自分でもよく分からないのだが、「黒」が使われる言葉には「ダーティー」なイメージを伴うものが多かったからかも知れない。漢字は使わないが、近年聞かれる「ブラック企業」などという言い方は、その最たるものだ。

もう一つ考えられるのは、文字の「単純さ」だったかも知れない。シンメトリーで、印鑑を彫るとしても、左右反対の文字を考える必要もない（印刷師の仕事としては、そんな単純ではないのだから）。画数が多くなく、アシンメトリーな名字を見ると憧れのようなものを感じた。

余談だが、「黒木」は古語の形容詞「黒し」の連体形と読みが同じなので、命名の時には気をつけなければいけない。「黒木瞳」に違和感はないが、「黒木」の後に、本来「黒」くては困るものが続いてしまうと変に聞こえてしまう。

何がきっかけだったか忘れてしまったが、初任校の何年目だったか、「黒木」という言葉が日本でいつ頃から使用されていたのか気になって調べてみた。まず、古語辞書を引いてみた。大体どの辞書も「樹皮がついたままの材木」

### 趣味・文芸

## 名字考

曾於高等学校

などと説明してある（因みに樹皮を剥いだ材木は「赤木」という）。古典の時代から使用されているのは間違いないが、どこまで遡れるのか？

私は、大学で所謂文学部に在籍した。その大塚には、当時、萬葉研究の第一人者であった伊藤博教授がいらっしやったので、私は上代文学を専攻し、萬葉集を研究した（もう全て忘れてしまったが）。大学卒業後も『萬葉集註釋』（澤瀉久孝著全二十巻）と関係書籍が手元にあったので、萬葉集の中に探すことにした。

「黒木」を、あの膨大な量の歌の中からどうやって探すのか？と疑問を抱かれる方も多いだろう。学問の世界には、学問の進展に役立つ地道な研究をした学者の成果がある。萬葉集における用語を全て整理した『萬葉集總索引』もその一つである。編集者は正宗敦夫氏。小説家正宗白鳥の実弟である。幅が十センチもあろうかという書物だが、これもまだ持っていたので、これを使って探すことができた。

萬葉集中「黒木」は三例出てくる。その中の一つに聖武天皇御製の短歌があった。

青丹吉奈良乃山有  
黒木用造有室者雖居座不飽可聞  
(巻八 一六三八)

漢字ばかりなので読みにくいのだが、「あをによし奈良の山なる 黒木もち」と訓む。歌意は、「奈良の山の黒木を用いて作った家は、いくら居ても飽きないことだなあ」

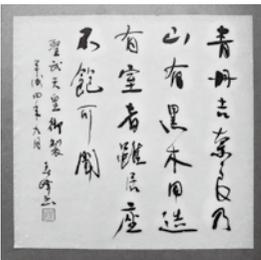
この歌の直前の元正太上天皇御製の一首も含めて左注があつて、元正太上天皇と聖武天皇が、佐保にある長屋王の別邸に行幸した際、そこでの宴席で、新しく建てられた長屋王の別邸を褒め称えて詠まれた歌のようである。

先述のとおり、「黒木」は「樹皮がついたままの材木」である。現代人の感覚とは違う感じが、ゴツゴツと野暮ったく洗練されていないが、居る人に豊かな寛ぎの空間や時間をもたらしてくれるらしい。

黒木 哲 二

「名は体を表す」ならば、自分もそういう存在になれるかも知れない、そんな存在でありたい、そんなことを思った。

次の赴任校で、中三の時の担任と一年間机を並べた。国語と書道を教えていらつしやった先生が、書道で、自分の好きな言葉を書いて表装までするという授業をやっていたとき、「好きな言葉を書いてあげるよ。」とおっしゃったので、先述の聖武天皇御製歌を書いていただいた。「黒木」のように自分ではなれてるだろうか。



岡元正昭（春峰）先生書

## 郷土の紹介



剣の平 見ておれ  
ぼくらは がんばるぞ

重富小(始) 河野 英明

### 一 重富校区の概要

重富校区は、始良市の南西部に位置し、鹿児島市に隣接している。警察学校や始良病院など県の施設をはじめ、始良インターチェンジや桜島スマートインターチェンジをもつ交通至便な地域として、イケダパンやヤマト運輸など企業の物流拠点となっている。

そのため、近年始良市の人口は増加しているが、特に、重富校区においても宅地化が進み、重富小学校の児童数も増加傾向(六百十五人)にある。

本校区は、産業や交通の拠点としての利便性と島津家由来の歴史と伝統を融合した地域であるといえる。

### 二 重富の歴史

平安時代末期、重富は蒲生に属していた。鎌倉時代初期に、島津忠久が薩摩守護になって以来、三百五十年余を経た天文二十三年(一五五四年)、十五代島津貴久の率いる島津勢が蒲生方の支城・岩剣城を攻略した。落城

後の岩剣城を任された三男・十七代島津義弘は、山麓に平松城を築いた。

江戸時代になり元文二年(一七三七年)、藩主・島津継豊は、弟・忠紀に越前(重富)島津家を再興させ、脇元・平松・船津・春花・触田の併せて一万石を与えて、重富郷とした。重富島津氏は、明治維新までの百三十年ほど続いた。

### 三 重富小学校の環境

重富小学校は、この平松城跡に建設された。校地は、総延長五百四十八・三メートルの野面積みの石垣に囲まれ、正面の高さ二・五メートルは、昔日のままの姿で、市文化財に指定されている。また、正門の門柱は、大正時代に、旧県庁の門を移設したものである。



また、校地南側には、約八千平方メートルの森に、梅園、竹林、茶園、柑橘園等があり、果実の収穫や野菜の栽培等を行っており、勤労生産的な活動に活用している。

### 四 おわりに

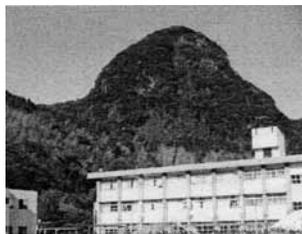
「金の夕陽に かがやきて  
ああ剣の平 くれゆけば  
心は澄みて おこそかに  
たがいにかざす ちえの火を」  
本校は、剣の平に築城された岩剣城の麓の

平松城の跡地にあり、明治二十一年の平松城平松小学校開設から数えて百三十二周年を迎える。

冒頭の校歌にあるとおり、「剣の平」は、学校のシンボルとして、長い学校の歴史とともに歩んできた。

戦国時代に島津義弘が戦の中で見上げた剣の平は、本校開校時百周年式典でも、現在でもその姿を変えず、凜として静かに学校を見守っている。

戦後、学制改革により、本校は、重富村立重富小学校に改称し、これまで八千六百十九人の卒業生を送り出してきた。確かな記録はないが、開校から考えれば、その倍以上の児童が本校を旅立っていかれたことになる。



剣の平

「剣の平

みておれ  
ぼくらは がんばるぞ」

門柱に掲げたこの詩のとおり、多くの卒業生が、剣の平に誓いを立て、自己の夢の実現に向けてがんばっておられる。

今後も、重富小学校は、すべての卒業生の母校として、郷里としての期待に応えられるような学校づくりに取り組んでいきたいと思う。

\*\*\* こころの詩 \*\*\*

### 冬が来た

きつぱりと冬が来た  
八つ手の白い花も消え  
公孫樹の木も箒ほうきになった

きりきりともみ込むような冬が来た

人にいやがられる冬

草木に背そむかれ、

虫類に逃げられる冬が来た

冬よ

僕に來い、僕に來い

僕は冬の力、冬は僕の餌えじき食ただ

しみ透れ、つきぬけ

火事を出せ、雪で埋めろ

刃物のやうな冬が来た

高村光太郎

## 一般財団法人校長会館だより

### 校長異動

○新任 令和二年十月三十日付

龍郷町立赤徳中学校長

土岐 邦 寿 氏

(前奄美市立赤木名中学校教頭)

### 教育長異動

○新任 令和二年十一月二十六日付

いちき串木野市

相良 一 洋 氏

(前鹿児島市立河頭中学校長)

### 〈お詫びと訂正〉

「鹿児島島の教育 特集号第66号」の目次と82ページに誤りがありました。お詫び申し上げます。笠利中(大)木場俊朗を木場敏郎に訂正を願います。(敬称略)

## 編集

### 後記



私には小学校五年生になる娘がおり、同じ広木小学校に通っています。夕食時は、学校の話題でもちきりです。我が子と同じ学校に勤務し、共通の話題で食卓を囲む幸せを噛みしめる毎日です。校長講話があった日は、「今日の話は、心に響いた。」とか「言っている意味がよく分からなかった。」などと評価され、全校児童の前に立つときは、かなりの緊張をもって挑みます。そんな娘が、先日、次のような話をしてくれました。

「五年生になって学校が楽しかった。いろんなことをするのにやる気が出る。だって、担任の先生が私たちのことを認めて、いっぱい褒めてくれるからだよ。」

ちなみに、この先生は新採二年目です。心理学者マズローの欲求五段階説によると、人間は生理的欲求、安全の欲求、愛と所属の欲求が満たされると、次に承認と尊敬の欲求が芽生えます。承認と尊敬の欲求が満たされると、最後に自己実現欲求が芽生えます。つまり、人間は生理的欲求・安全欲求とともに承認欲求が十分満たされてはじめて、自身をより成長させようという自己実現欲求に従って行動できるようになります。娘の話から改めて承認する(褒める)ことの大切さを感じることも、「ふと」広木小の先生方を認め、褒めているかな。」としきりに反省することでした。「明日から、毎日頑張っている職員を認め、褒めて伸ばそう。」

最後になりましたが、今月も御多用な折、玉稿をお寄せいただきました皆様方に心から感謝いたします。橋口俊一(広木小学校)